

質問

開港の綿業への影響について 日本の開港によって国内の綿業はどのような影響を受けたのか、具体的に解説して下さい。

[回答者] 鈴木 淳

綿関係の産業には、綿木を栽培して綿花を収穫する農業から、収穫した実綿から種を除いて繊維原料としての繰綿を製造する工程、さらに糸を紡ぐ紡績、布に織る織布あるいは編物（メリヤス製造）の諸工程がある。日本の開港前には、長崎経由で僅かな綿布輸入があったほかは、国内綿業が国内の綿布需要を満たしていた。綿花を栽培する農家が染色も含め織布までの全工程を行うこともあったが、繰綿と糸はそれぞれ商品として流通し、綿花を栽培しない地域でも紡績や織物が行われていた。

イギリスの産業革命は、飛び杆による織布の能率向上にはじまり、紡績機械の発明による紡績の機械化、さらに力織機の発明による織布の機械化へと進み、日本の開港までにはアメリカ産綿花を主な原料として生産した機械紡績糸や綿布を各国に輸出するようになっていた。一方で、日本ではイギリス産業革命前の生産技術で紡績や織布が行われていたから、開港と共に国

内価格より安価なイギリスなどの綿製品が流入して国内綿業が大きな打撃を受けた、というのが伝統的な理解である。これは、産業革命によって誕生した機械を用いる資本制生産が手作業による自給的な生産を解体しながら世界の市場を統合して行くと言う大きな流れに即した語り方である。

これに対して、一九七〇年代半ばから川勝平太氏が展開したのが、イギリスと日本の綿業のあり方の違いのために国内綿業は直接的な打撃を受けなかったという議論である。川勝氏は、イギリスでは主にアメリカ大陸で産する長繊維の綿花を原料として細糸を作り、これで薄地の綿布を織ったのに対し、日本や中国では自国産の短繊維の綿花を原料として太糸を作り、厚地の綿布を織っていたことを強調する。このような相違があるので、イギリス製の細糸や薄地綿布が流入しても厚地綿布を作る在来綿織物業が生産を伸ばし、それに原料綿糸を供給するため、イギリス紡績業より太い糸を作る機械紡績業の展開が誘発された⁽¹⁾とした。気候風土や他の繊維との競合状況などを背景に綿製品の需要構造が異なったという論点は、人々の歴史が単なる経済合理性や一般性に回収されない固有性を持っているという説明で、一国レベルでの歴史過程の理解へ一歩を進めた。

実際には、一八五九年の開港直後からかなりの量の綿布や綿糸が流入した。このため、高村直助氏は川勝氏の指摘を踏まえ

て、輸入綿布にはやや品質が異なっても価格によっては在来綿布と代替されるものが多く、これが在来織物業へ打撃を与えたと論じた。²⁾明治初年までは国内生産量の統計が作られていないので、各産地の盛衰が激しい中で全体としての動向をつかむことは難しく、論争は決め手を欠いた。

その後、田村均氏がそれぞれの布の性格にまで踏み込み、流行に注目して織物の消費や織物産地の対応を検討した。³⁾イギリスの綿工業はインドから輸入された薄手綿布を国内で製造しようとしたところから発展したが、同様なインド産綿布は日本へも近世初頭から輸入され、珍重されていた。その模造は江戸時代を通じて試みられており、開港前には絹織物の着用規制もあって綿織物の一部が高級化し、これに対応して国内産としては比較的長い繊維を持つ綿花から糸の太さにむらが出ることを覚悟して紡ぎ出された細糸を用いた薄地の縞木綿が織られていた。この縞木綿には糸むらのため、インドやイギリスの製品とは異なる独特の風合いがあつたが、⁴⁾このような生産に取り組んでいた織物産地は、細い輸入綿糸を従来の限界を突破する織物素材として早い時期から受け入れた。⁵⁾また薄地のイギリス産綿布は、絹より安く在来綿布の一部とほぼ同価格で競合する裏地として利用されたほか、長崎貿易によって僅かに知られていた高級舶来品が安価に入手できるようになったとして、あるいは新たな

素材として流行した面があつた。⁶⁾実際の需要のありかたにまで目を向けたことで、川勝氏のわかりやすい整理では見落とされた、輸入綿製品需要の文化的背景が明らかにされたのである。

開港による綿製品輸入が在来綿業におよぼした影響がわかりにくいのは、開港直後、一八六一年からのアメリカの南北戦争によるアメリカ綿の入手難を背景に、綿の輸出が進んだためでもある。一八六三、六四年には綿が生糸に次ぐ輸出品となり、六四年には三八四〇トンが輸出され価格ベースで輸出品の二割を占めた。国内相場の四倍程度で外国商人が買いつつたという。綿作地帯では繰綿の販売で十分な利益が得られるので織布を行わなくなったとの記録もある。⁷⁾一八六四年の輸出量は一八七四～七七年平均国内綿産量の四分の一にあたり、明らかに国内での手紡ぎや織布を衰退させたであろう。これは戦争に伴う一時的な現象である。しかし、イギリスの紡績資本が、機械設備に投資している故に、原料の調達先を変えてでも操業を続けようとして日本からも綿を購入したのであるから、産業革命後の世界市場に組み込まれた結果として在来綿工業が打撃を受けた事象といえることができる。

南北戦争の終結により、一八六五年の後半以降は輸出が途絶え、国産綿は在来綿布生産にあてられた。そして国産綿の作付量は一八八七年に史上最大となる。⁸⁾その収穫量は繰綿換算二万

九三八五トンで、翌年からは国内機械紡績所向けに主に中国から綿花輸入が進む一方で国内生産は減退し、二、三年のうちに輸入が国内生産を凌ぎ、インドからの輸入も増えた。⁽⁹⁾国内の綿作が本格的な負の影響を受けるのは、国内に機械紡績業が成立し、その機械に品質・価格面で適した綿が求められるようになってからであったと言える。幕末から明治初年の変動はよくわからないが、国産の短繊維綿花を用いた在来綿布の生産がこの時期に最大になったことは確かで、川勝氏の議論が一面では妥当なことを裏付けている。

一方で、一八七四年から七七年までの平均では、国内で消費される綿製品四万二〇〇〇トンに対し国内産綿は一万五九〇〇トンであり、⁽¹⁰⁾国産綿花によって生産されたのは四割弱にとどまった。自給率を低下させた大きな要因は田村氏が明らかにしたような民間の、さらには軍需品や洋式の衣類等を含めた綿製品全体の需要拡大であった。国産綿に立脚する在来綿業は衰退していなかったにせよ、それ以上の輸入綿糸・綿布が国内で用いられるようになったのである。

一八八七年まで見通せば、国内綿花を原料とする在来織物業は拡大した。しかし、そのことは必ずしも在来綿業の拡大を意味してはいない。一八六七年に操業を開始した鹿児島紡績所をはじめ、わずかながら輸入機械を利用した紡績所が操業を開始

し、一八七〇年代半ばからは国内で開発された簡単なガラ紡機も太糸を供給しはじめた。統計や推算の不備はあるのだが一八七四年の繰綿生産量は一万二一八六トンで二万二六八〇トンと推算される開港前の生産を明らかに下回っている。⁽¹¹⁾以後八七年までの二倍以上の綿花生産の伸びは、紡績工程の一定の機械化を前提に進展したと考えられる。国産の綿花が機械で紡がれることは、それだけ手作業での紡績を減らす。手作業では、織布より紡績の方が手がかかる。富山の新川木綿の場合、繰綿を買って布を織っていた家が、糸を買って織るようになると、従来の二・五倍の布を織らないと従来通りの収入を得ることができなかつたという。⁽¹²⁾それゆえ、ある織物産地の受け入れる材料が繰綿から糸に変わったなら、織物の生産が従来の二倍に増えたとしても、綿工業で得られる収入は減ったはずである。これを織物生産額で見れば在来織物業が発展したことになるが、付加価値ベース、すなわち地域の純収入ないし就業機会で考えれば規模が縮小したことになる。在来織物業は紡績工程を切り離し、織布に専念する形に再編されて行ったのである。

開港は、従来の国内価格より安価な綿製品、のちには綿花の輸入をもたらし、綿製品を多様化させつつ普及させた。川勝氏の指摘したような需要構造の相違から来る在来綿業、特に綿織物業の根強さは確かに存在したが、国内市場が機械制生産が展

開していた国際市場に対して開かれたことは、国内綿業の再編をもたらしした。

註

- (1) 川勝平太「アジア木綿市場の構造と展開」〔社会経済史学〕五一卷四号、一九八五年）など。
- (2) 高村直助「維新前後の『外圧』をめぐる一、二の問題」〔社会科学研究〕三九卷四号、一九八七年、同「再発見明治の経済」ミネルヴァ書房、一九九五年所収。
- (3) 田村均『ファッションの社会経済史』（日本経済評論社、二〇〇四年）。田村氏の議論は中岡哲郎『近代日本技術の形成』（朝日新聞社、二〇〇六年）にわかりやすく紹介されている。
- (4) 田村均「木綿の東方伝播と唐棧模倣」〔埼玉大学教育学部紀要（人文・社会科学）〕五九卷一号、二〇一〇年）一四八頁。
- (5) 田村『ファッションの社会経済史』（註（3）前掲書）第二章。
- (6) 田村『ファッションの社会経済史』（註（3）前掲書）第五章ほか。
- (7) 横浜市『横浜市史 第二卷』（有隣堂、一九五九年）五一・五三一頁。
- (8) 岡光夫『日本農業技術史』（ミネルヴァ書房、一九八八年）一八三頁。
- (9) 三邊清一郎「明治初期に於ける我国綿花生産の凋落」（慶応義塾経済史学会『明治初期経済史研究 第一部』巖松堂書店、一九三七年）九八頁。
- (10) 明治一三年綿糖共進会開会式の式文より（大阪市『明治大正大阪市史 第七卷』（日本評論社、一九三三年）九一八頁）。
- (11) 三邊「明治初期に於ける我国綿花生産の凋落」（註（9）前掲論文）八一・八二・八九頁。
- (12) 谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』（東京大学出版会、一九九八年）一六四頁。
（すずき・じゅん／東京大学文学部教授）